

森を守る 森を活かす



皆川 典久さん 矢吹 誠次さん
薄井 充良さん
橋本 勝弘さん 石井 重一さん

原生林の保護活動だけでなく、人の手が入ることで守られている森もあります。魅力ある里山は、地域で頑張る様々な立場の人が関わることで保全され、地域活性化につながっています。

手付かズの里山からは、何も生まれない。

穏やかな森の中。柔らかな光、心地よい風。木々のざわめき。足もとにはクリやドングリの実。豊かな森を眺めていると、今にも小鳥やリスなどがやってくるようでワクワクします。

山からは、何も生まれない。枝や小枝、倒木はチップにして敷き詰め、井戸を手掘りして掘削。建築の経験はまったくありませんが、自分たちで管理棟も造りました。豊かな森の資源を活かし、林床を活用。タラノメや行者ニク、ミスナ、ワサビ、シドキなどの山菜や、キノコの栽培に着手します。

里の森みらいが里山の整備を始めたのは平成十九年。「当時はシノタケだらけで真っ暗。荒れていました」と話す、リーダーの薄井充良さん。薄井さんが子どもの頃遊んだ里山は身近な存在で、長い時間をかけて人々が自然と寄り添いながらつくりあげてきた、豊かな自然環境でした。「あの頃のように、子どもたちが遊べる里山にできないものだろうか。メンバーの親類の山林6000坪を借りて始めたもの。全員林業は素人。大きな重機が入らない森の中で使う道具は、今でもチェーンソーと刈り払い機くらい。当初は「軽トラのタイヤ半分が埋まってしまいうくらいぬかるんでいた」と話します。手作業で下刈り、間伐をし、子どもの頃遊んだ里山に少しずつ近づいていくにつれ、想いが確信に変わります。「手付かズの里



▲里の森みらい発足時メンバー/左から渡部 信行さん、石井 孝幸さん、関根 一男さん、薄井 充良さん、佐久間 美文さん



里山の原風景(平成19年撮影)



あきらめない

キユウリ栽培農家の協力により、廃棄資材でキノコのハウスを建設。ナメコ、ヒラタケ、ブナシメジなどの栽培を始めました。合わせて原木キノコによるシイタケなどの栽培も開始。手入れをされた森には絶滅危惧種に指定されているキンランなどの山野草も見られるようになりました。順調に整備が進む中、襲った東日本大震災と原発事故。里山の整備は中断せざるを得なくなり、キノコや山菜は全面出荷停止に。「どうしていいかわからなかった。情報を集めるしかなかったです」と薄井さんは振り返ります。地元の山を荒廃させるわけにはいかない。間伐を継続し、放射能の除去に有効とされるものには藁をもすがる思いで取り組み、キノコ類は全てハウス内生産に移行。2棟だったハウスを6棟に増設しました。



▲ナメコN2号



▲シイタケ



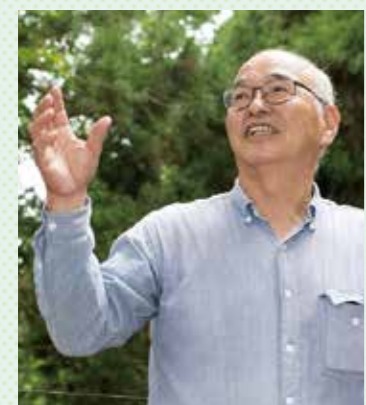
▲廃棄資材で建てられたビニールハウス



▲シイタケの収穫

森林資源を活かす

里の森みらいを立ち上げたのは、人材派遣業を営む、ネットワーク情報サービス有限会社代表(現会長)の関根一男さん。森の案内人も務めている森の達人です。現在メンバーの中心となっている薄井さんと矢吹誠次さんの二人は、以前同じ会社で働く同僚でした。それぞれ退職を迎え、第二の人生として始めた里山の整備。それは中高年退職者の再就職先の受け皿にもつながりました。一人も林業経験者がいない中、皆で知恵を出し合い、森林を整備し山菜やキノコを栽培。キノコは県の品評会に出品し、林野庁長官賞ほか多数受賞。取り組みを発表した林業研究発表会では県知事賞を受賞しました。現在菌床栽培のシイタケが三千株、ヒラタケとナメコを各千株栽培。繁忙時は毎日収穫し、玉川村生産物直売所ごぶしの里などに出荷しています。そのほか、福島県きのこ振興センターの視察を受け、新種の大粒でぬめりの少ないナメコ株を譲り受け栽培しています。



▲里の森みらい リーダー/薄井 充良さん



▲矢吹 誠次さん



▲現在活動中のメンバーのみなさん



キノコ購入・見学希望の方はお電話でお問い合わせ下さい。

里の森みらい
TEL.0248-63-7477